

Title	南蠻香録：過去の香料の性状と主要香料の商品史的概観
Sub Title	
Author	山田, 憲太郎(Yamada, Kentaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1944
Jtitle	史学 Vol.22, No.4 (1944. 11) ,p.55(425)- 114(484)
JaLC DOI	
Abstract	本稿は昭和十八年十一月三日印度支那研究會の例會に於ける私の報告に因出する。同會は私の報告を速記する勞をとられ加筆を求められたが、何分御話することに不馴れな私であるから極めて不十分であつた。故に今その時の内容に基き若干の訂正と其後の知見を加へ本稿を草し終へた。然し淺學にして且つ日常の多忙な業務に迫はるる私であるから不備は多々存すると思ふ。たゞ拾數年來香料業界に生活する私の體驗と東西交渉史に寄せる史趣からなる貧しい一編が南海香料史の一考察として識者の一助たるを得ればと念じ、加へて博雅の叱正を受くる機會を得んことを願ふのみである。終りに本稿執筆の動機を與へられた印度支那研究會、並びに發表に紙面を併せられた三田史學會に感謝の意を表してやまぬ。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19441100-0058">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19441100-0058</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 南 蠻 香 錄

——過去の香料の性狀と主要香料の商品史的概観——

山 田 憲 太 郎

## 第一節 過去の香料の性狀

- (一) 香料の産地と種類
  - (二) 匂ひは嗅覺と味覺に訴へる
  - (三) 香料の使用と文化
  - (四) 香料の調合
- 第二節 主要香料の商品史的概観
- (一) 樹脂とバルサム（沈香、乳香、沒藥、蘇合香、安息香）
  - (二) 材の匂ひ（龍腦、樟腦、白檀）
  - (三) 樹皮と根（ベチバー、甘松香、肉桂）
  - (四) 花（ナルシツサス、ジャスミン、薔薇、鬱金香、梔子、丁香）
  - (五) 葉（茅香、藿香、薄荷、零陵香、艾納香）
  - (六) 果實と種子（胡椒、細荳蔻、肉荳蔻、大茴香）
  - (七) 動物性の匂ひ（麝香、靈猫香、龍涎香）
  - (八) 過去の香料の辿るべき道

本稿は昭和十八年十一月三日印度支那研究會の例會に於ける私の報告に因由する。同會は私の報告を速記する勞をとられ加筆を求められたが、何分御話することに不馴れな私であるから極めて不十分であつた。故に今その時の内容に基き若干の訂正と其後の知見を加へ本稿を草し終へた。然し淺學にして且つ日常の多忙な業務に追はるる私であるから不備は多々存すると思ふ。たゞ拾數年來香料業界に生活する私の體験と東西交渉史に寄せる史趣からなる貧しい一編が南海香料史の一考察として識者の一助たるを得ればと念

じ、加へて博雅の叱正を受くる機會を得んことを願ふのみである。終りに本稿執筆の動機を與へられた印度支那研究會、並びに發表に紙面を供せられた三田史學會に感謝の意を表してやまぬ。

## 第一節 過去の香料の性狀

### (一) 香料の産地と種類

ここに言ふ處の過去の香料とは現代の天然精油或は合成(人造即ち化學)香料を使用する以前のものを意味し、佳香に富む植物の樹脂・材・根・皮・葉・花・果實、及び若干の動物性及び礦物系に屬するものを採取し、大體主として何等人工を加へず使用したものである。(植物の各部に存する香氣分のみを抽出したのが主として天然精油で

近世期に出現し過去の香料に代位したが、この天然精油或は其他の天然香料に代位するものとして現代の化學香料が生れた。我國では明治維新以前の香料が大體過去の香料であると考へて差支へない。) 夫は光と熱に恵まれた熱帶亞細亞の廣地域を中心として産し

一、西は西南亞細亞(小亞細亞、ペルシヤ)、アラビヤの南部と東アフリカの一部(エチオピヤ、ソマリーランドからガルダフイ岬に及ぶ一帯)

二、中央は廣大な印度(北は雪山から南部印度沿岸まで)ビルマの各地とセイロン

三、東は南支那と南方圏各地（印度支那、馬來、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、モルツカ、小スンダ）の三地域に大體區別し得よう。そして古代・中世・近世を通じ西洋・印度・東洋の世界三大文化圏が切に需要した重要物資の一であり、大部分は殆ど東西兩洋を結ぶ海上交通路にそふて産し、陸路よりも主として船舶による運送方法に依據したから、香料傳播の歴史は熱帶亞細亞資源の世界三大文化圏への移動であると同時に、之等文化圏相互間の文化文物の交流に大きな影響を與へたことは喋々を要しない。

過去の主要香料を平易な分類に基き、先に記した熱帶亞細亞の三大地域別に分ち表示すると

種別	地域		
	西南亞細亞	印度・ビルマ	南支那
樹脂とバルサム	乳香・沒藥・蘇合香・ガルバナム・ラダナム	沈香・偽乳香・偽蘇合香	沈香・楓香脂・安息香ダマル
材		白檀	龍腦・樟腦・白檀
樹皮と根	イリス・コスタス	ベチバト・生薑・肉桂 甘松香	薑・肉桂
花	ローズ・素馨・水仙	サフラン・茉莉・梔子	丁香
葉		茅香	零陵香・艾納香・藿香 薄荷

果實と種子	胡椒・肉荳蔻	大茴香・胡椒・肉荳蔻 小荳蔻
動物性	龍涎香・貝・靈猫香	麝香・靈猫香・龍涎香 甲香
礦物性	麝香・龍涎香	硫黄香

の如くなる。即ち植物の芳香に富む部分を天然の状態のまま採集乾燥保存するものと、二、三の動物の腺分泌物と、焚香上の特殊用途に甲殻類の或種若くは硫黄を使用したまでである。然し例へばローズの花を蒸溜したローズ油は中世期から、そして近世期に入り種々の植物精油が現はれ、近世末の西歐香料の中心は之に移つたのであるが、夫は私の意味する處の過去の香料の主體ではない。なほ前掲表示の香料に就ては第二節に各々商品史の見地から概説して見ようと思ふ。

(二) 匂ひは嗅覺と味覺に訴へる

香料は元來、味は甘辛苦酸鹹を有し收斂性に富み、消毒防腐性と浸透性を具へてゐるが、この性狀を人間の五感の内の味覺と嗅覺によつて樂しむもので、過去の香料を使用の側から分類して見ると、専ら嗅覺に訴へる。

一、薰じてその煙氣に馨香を感じるもの

二、身體に香料をつけること即ち塗布する、或は香湯に浴し若くは香氣を身に佩びる方法と、味覺を主とする

三、日常生活の飲食料品の賦香に用ひ味覺に訴へる（この場合味覺とともに嗅覺が同時に作用すると勿論である）

の三つがある。そして味覺と嗅覺に訴へるこの香料は、何れも藥物として使用されて居り、「香藥」といふ字の示す如く、藥物と表裏一體の關係に立つてゐるのは、香料本來の消毒防腐浸透性の然らしむる處に基いて居り、その用法も口中より體內に服用するか、身體に塗布し若くは洗浴するか、或は薰煙によつて患部を淨化するかで、大體前記の香料使用方法と一致してゐる。

次に主たる用途に基き主な香料を前述の用途別に假に分類して見ると

一、沈香・乳香・白檀・安息香・龍腦・藿香・龍涎香・甲香・硫黃香は薰じ

二、薔薇・甘松香・茅香・根香・イリスは身體につけ

三、胡椒・丁香・肉桂・肉荳蔻・小荳蔻・大茴香・生薑は口に入れる

が、白檀・龍腦・龍涎香は身體の外部にもつけ、丁香・肉桂・大茴香・甘松香・茅香・根香は薰じた  
り或は身體につけ、安息香・龍腦は口に入れたりして、互ひに混交使用してゐるから、香料各品の用途を一概に斷定することは慎しまねばならない。又時代と使用の場所即ち文化圏の相違によつて、一

つの香料に對する主要用途にも變化があつた。

いささか極端ではあるが、過去の香料需要者であつた東洋・西洋・印度の三文化民族の香料使用に對する特徴をあげると、東洋特に支那人は延命長壽の秘藥として神秘藥物視し、印度人は身體につけ、西洋人は口に入れて味はつたとも言ひ得る。然し香料を焚くことは各々に共通した事實であつて、この焚く原料たる香料の主體が東洋と印度では沈香・白檀系統であり、西洋は乳香・沒藥であつた。次に印度人は香料を身につけて樂しむと言つても、この風習は古く小アヂヤ・古代エヂプト地方にも行はれ油脂類に香氣を吸収させて香膏を作り古代西洋人の香料使用上忘れてならないものとなつてゐる。又中世及び近世初期の西歐では胡椒・丁香・肉荳蔻を中心とする所謂スパイス類が日常飲食料品の調味賦香と保存に不可缺のものであつて、香料即ちスパイスである時代もあつた。

(附記) 香料は味覺と嗅覺に訴へる以外に、古代エヂプトでは木乃伊の製造原料として屍體賦香料に、東方では佛像の粗材或は仕上げ材料に、若くは東西を通じ種々の器用調度其他に廣く使用してゐるが、之等は香料使用の本體から派生した用途に過ぎない。

### (三) 香料の使用と文化

熱帶亞細亞の自然風土の中に産する種々の佳香が、自然の匂ひとしてそのあるがままの姿に於てではなく、一つの匂ひ即ち香料として人間の生活に採り入れられるやうになつたのは、人生に對し實際

上の必要が感じられたからで、この必要度は大體文化の高低に應じ、未開民族よりも高度の文化を持つ民族の方が強かつたと言ひ得るであらう。遠い過去の時代の熱帶亞細亞の未開の先住民がその居住地に自然に香料を産するに拘らずこの價値を認識しない時、香料としての價値を知つて熱望し求めたのは大體遠い他の地方の文化の高く進んだ異つた文化圏の民族であつた。但しこの場合文化が高いからと言つて必ずしも香料を使用したと全般的には斷定出來ない。又逆に香料を使用しなかつたからといつて必ずしも低文化に停滯して居つたとは言へぬ。要するに香料原産地の遠い過去の先住民と夫等に比較して高い文化を有した民族を私は意味してゐる。

今二三の例をあげて見ると、ジョアン・デ・バロスはモルツカの丁香に關し

「土人は病氣のとき丁香の粉末を額と顔とに塗ること以外にはそれを使用するの智識を持たなかつた。支那人の入國によつて初めて丁香の智識が生じた。彼等は不足物を土人に與へて丁香を得るの消息に通じ、丁香を所有しやうとの慾望を抱いた。」

と初めてモルツカの丁香を香料として認識したのは、遠い昔のモルツカの先住民ではなくて外來の異民族であつたことを語つてゐる。但しこの場合支那人が丁香の最初の價値認識者であつたとするのは或は誤りで、正確にはジャワ人若くはヒンズー族かとせなければなるまいが、香料としての丁香の發見者がモルツカの先住民で無かつたことを、私はバロスの採取した古い該地方の説話によつて例證す



るだけであることを附言する。又十四世紀初めのイブン・バツタは「肉桂樹がセイロン島内部の山地より伐り出された材木として急流を流れ下り下流の河岸に積み重ねられ、マーバル及びコロマンデルの住民が夫を求め國王に珍らしい衣類等の贈與をなし、その代りに無代で島から運び去つた」と當時のセイロン島の原住民が肉桂の價値を認めて居なかつたことを記してゐる。沈香に就ても水經注(卷三六)に林邑記を引いて「朱吾以南有文郎野人、野居無室宅・依樹止宿、食生魚肉、採香爲業、與人交市、若上皇民矣」と朱吾縣(佛印洞海 Dong-hoi か)の文郎人(Moi 族の Bahmar か)が他民族との交易に供するため沈香を採取することを語り、西方ではアラビヤの南部海岸地方と對岸のソマリランド海岸に産する乳香と沒藥を、その地方の住民はたゞ之を必要とするエヂプト、小アヂヤ(若くは西南アヂヤ)地方の民族のため交易上の利益の對照として採取する次第を古くテオフラスタスは記してゐる。之等の數例を以てして私は香料の原産地である地方のインドネシヤ人やアフリカの黒人の多くはその豊富な香料に無關心であり、溫帶地方その他の文化民族が之を珍重して遙々購ひ來るやうになつて始めてその價値を知つたのであると考へる。しかも之等の先住民はその香料を交易上の利益の對照物と考へただけで自ら消費するやうなことは古い時代には大體無かつたやうだ。

即ち遠い過去の熱帶亞細亞の先住民は生命の本能に基いて彼等の周圍に自然に生育する處の香氣を放つ植物資源が蟲害を除き惡臭を除き或は刺戟を興へることを知つてゐたとしても、彼等は之を香料

(即ち匂ひ)としてとりあげ、よりよく生活に利用するの域には達してゐなかつた。換言すれば自然の姿にあるがままに於て匂ひを知つてゐたのであつて、匂ひ夫自體を香料として活用する智識を有せなかつたのである。

之に反し香料を産する熱帶亞細亞の各地に古く移住若くは往來したより高い文化を有した民族は、普通のものとは非常に異なつた佳香に富む物品であることに注目して、先づ人間の必然的な事實である處の死に導く主要原因である病氣若くは負傷等の治療に藥物として用ひ、

一、神々に動物性の犠牲を供して焚く惡臭をさけ神の祝福を受けんとして香料を燃料に加へ、死體を火葬にする風習を持つ民族は火葬の燃料に香木を使用し、或は屍體に香料を塗布して屍嗅を防ぐのであるが、古代エヂプト第十一王朝(西曆紀元前二十一世紀)の Mentuhotep 四世の石棺に動物の犠牲を供する時乳香を加ふとあり、新約聖書ヨハネ傳十九章(四十節)の中に

「ここに彼等イエスの屍體をとりユダヤ人の葬りの習慣にしたがひて香料とともに布にて巻けり」と言つてゐるし、

隋書眞臘國の條には「其喪葬、男女皆七日不食、剔髮而哭……………以五香木燒之、取灰以金銀瓶盛……………」(太平御覽・卷七八六)とする。

又溫熱乾燥の地方では體臭が問題であるが、香料を薰じ或は粉末若くは膏狀にして塗り、又は香湯

に浴して爽快さを味ふのである。天竺國熱、又以身臭故、以香塗身、供養諸佛及僧（宋、法雲、翻譯名義集、卷三衆香篇）とする説明はこの消息をよく語つてゐる。

二、又神や天を敬する祭禮の諸儀式は火に於て香を焚き、酒と食物を献じ

「人素祭の禮物をエホバに供ふる時は麥粉をもてその禮物をなしその上に油をそそぎ又その上に乳香を加へ、これをアロンの子供なる祭司達の許に携へゆくべし、斯くてまた祭司はその麥粉と油一握をその一切の乳香とともに取り之を記念の分となして壇の上に焼くべし、是すなはち火祭にしてエホバに馨しき香たるなり、」（舊約聖書、レビ記、二章、二―三節）

や或は奠桂酒兮椒漿（楚辭卷二九、歌東皇太一編）援化斗兮酌桂漿（同東君篇）とする所である。そしてやがて飲料の保存と佳味の要求に基き、香料の或種が最適することを知らると、飲食品の賦香が始り、味覺の快は食慾の増進となり且つ美味の保存を願ひ、味覺と嗅覺を通じて香料の與ふる刺戟は寒溫帶地方では身體の保温に、熱帶地方では暑氣を防ぐ效能を示すにいたつた。

以上の如く私は人間の死といふ事實と、夫に伴ふ宗教上の禮拜の二點に香料使用の起源を求めて見たのであるが、何れも文化が高まれば生活環境の上から香料を必要としたのであつて、前記の諸項は互ひに因となり果となり、何れの使用が早く發生したかは各民族によつて異なること勿論である。そして香氣を如何によく楽しむかの點に於ては香料使用上の一つの工夫を加へ、次項にのべる香料調合

の技術を生み、香氣を如何に長く保存するか的手段として、植物性油脂或は動物性脂肪若くは油に香氣を吸収させて香膏と香油を造り頭髮や身體に塗布して諸化粧品之源流へと進んだ。夫から香料自體が人間の神經を刺戟する事實は甘美な佳香の快樂に人を導き、性的本能と密接不可分の關係を有するにいたり、媚藥として香料の有する役割は忘るべからざるものとなつた。又この性的刺戟とは反對に崇高な宗教儀禮或は精神修養の手段方法として不可缺の要素となつたこと勿論であり、終りには香料の匂ひを匂ひとしてのみ、換言すれば専ら趣味として香氣のみを愛玩する域に達し、匂ひの遊戯をさへ生むにいたつたのである。

#### (四) 香料の調合

嗅覺と味覺に訴へる香料は實際の使用に於て如何なる場合にも、大體種々の香料を各々適當量調合して一つの匂ひとなし（この完成した香氣をも香料といふが、嚴格に香料とは夫に供せられる種々の原料である個々の香料を指すべきである）、之を焚き或は洗浴の資、化粧の料、調味品の賦香其他にあてるのが原則である。何故に香料は調合せなければならぬか、單一の香料一品では原則として（例外として單品の香料を使用することもある）満足されぬのか。この點は試みに直接各種の香料一種（品）をとりあげて嗅いで見ると案外率直に理解し易いが、要するに一種の香料では匂ひが餘りにも

單純であつたり或は粗野で圓熟味を缺くからであるが、今一つの大きな因由は元來香料の多くは揮發性に富み佳香は發散し易く、折角の快も去つてしまふから、香料の中で比較的香氣の發散度の遅いもの或は香料以外のもの（即ち佳香を有せない臭いもの）でも香料の發散を押へ得るものを見出し、之等を數種の香料と調合し全體の香氣即ち匂ひをなるべく永く樂しみ保存しようと願つたからである。例へば紀元前四世紀のギリシヤのテオフラスタスは植物考の匂ひに關する考察中に

「各種の香料を調合することは香氣を出来るだけ長く保存するためで、この目的を達するため油脂を媒體に用ひるが之は香氣を十分に永續させ且つ使用に便ならしめる」と説き又「香料を調合することは美味を出すことを目的の一つともする」と調味用賦香の香料に調合の必要な所以を説いてゐる。

さて各種の香料原料を調合して適當な匂ひを造る技術は何時頃始つたか明白でないが、東洋・西洋・印度ともに早く古代にこの技術が存してをり、例へば出エヂプト記（三十章、三四—三六節）は肉桂・沒藥・ガルバナム・貝殼・乳香を各等量調合し鹽を加へ細かに搗き碎いて焚香に供すとなし、箴言（七章、一七節）は寢床に用ふる匂ひは桂皮・沒藥・蘆薈を調合したとし、前記のテオフラスタスは「香料は調合して始めて匂ひを發す」とさへ言ひ、酒類、香膏類の匂ひの調合製法に關し詳細論じ諸種の香料原料（天然香料）を調合して造つた匂ひ（香料）を人工香料といふ様な意味の言葉で表現してゐる。諸

々の佛典にも調合して使用する記事があり、一例を引くと金光明最勝王經(四天王護國品)に安息香・白檀香・龍腦香・蘇合香・多揭羅香・薰陸香を等分に和合して焚くとあり、印度でも古くからそうであつたことがうなづける。支那では後漢書の撰者である宋の范曄は和香方といふ香料調合の專書かと推定し得るものを著し、その序文中に沈香を中心に麝香・零陵香・藿香・詹糖香・甘松香・蘇合香・安息香・鬱金香の取扱ひを論じ(本書はこの序文のみが後代の諸書に収録残存してゐる。但しその内容が原初のものか否かには若干の疑問がある)、又隋書經籍志には「香方、雜香方、龍樹菩薩和香方」等の香料の專書で大體調合をも併せ論じたらしい書名が録されてをり、隋時代にはかかる著書を必要とする域に達してゐたらしいが之等の書は残つてゐない。

終りに香料調合技術上注目すべき點は、元來調合の目的が香氣全體を調和し匂ひの發散を押へ匂ひの永持ちを期し、且つ焚香なれば煙を立たせ燃焼を容易ならしむるため硫黃の如きを補助物として用ひ、調味賦香の場合には味覺に有效なものを充當する。故に調合の技術上必要な種々の原料が香料と見なされて存在することは、夫等のみとしては匂ひとして有効でないから既に調合技術の存在を立證する。例へば甲殼類即ち支那人の言ふ甲香は元來貝殼で之のみを焼くと極めて嗅いが、この乾燥粉末を他の香料に混じると全體の匂ひを安定させ且つよくする。故に三國時代・吳の萬震の作と傳ふる南州異物志は甲香を「雜(合)衆香燒之、皆使益芳、獨燒則嗅」(唐慎微、證類本草卷二二、太平御覽卷九八二)と

效能用途を明言してゐるから、三世紀代の支那人は南方の諸香料原料を自由に驅使（調合）して匂ひを造つてゐたことを技術上立證し得る。我國では天平八年の法隆寺伽藍流記資財帳に種々の香料中に甲香があげられ、又零陵香・藿香の如き匂ひの安定保留劑もあるから同様の事が言ひ得るのである。

（追記） 諸種の香料を調合することを支那人は合香と稱し、梁の陶弘景はよく各品に合香家要用と註記してゐる。宋の陳敬は香譜に

「合香之法、貴於于使衆香、咸爲一體、麝滋而散、燒之使勻、沈實而腴、碎之使和、檀堅而揉、揉之使膩、比其性等其物而高下、如醫者用藥、使氣味各不掩、」即ち諸香料を合して新しい一つの匂ひを生む調合の目的をよく説いてゐる。尙麝香・沈香・檀香の性狀の説明は劉宋の范曄和香方の序文の内容に稍似てゐる。かかる點より私は范曄の著作内容（今は失はれて無いが）は香料の調合を目的としてゐたかと推定する。

（附記） 匂ひは主として諸種の香料を調合して使用すること上記の如くであるが、東洋特に支那及び日本で沈香木一種（或は白檀）を焚いて香氣を愛賞した方法が香料使用（特に焚香上の）上の特異な存在として記憶されねばならぬ。この場合の使用は種々の香料を調合して作つた複合の匂ひの美から進んで、單純な一種の香料の粗樸な姿の中に無量の複雑さを内藏する澁い匂ひの美を發見したのであつて、夫は原始的な香料の愛賞ではなく沈香木の持つ特異性を活かした高い匂ひの

文化であつたことを忘れてはならない。

## 第二節 主要香料の商品史的概観

前節(一)に掲げた主要香料の分類表に依つて主要香料の商品的性状を、東亞の香料史といふ觀點から眺め、諸種の香料の史的理解を容易ならしめんとする私の意圖の一端を茲に述べる。

### (一) 樹脂とバルサム

植物の分泌物である樹脂(レジン)とバルサムは過去の香料の大宗で、特に焚香は東西ともにこの樹脂系香料を根幹として成立した。(假りに極めて狭い意味に過去の香料を解し、之を焚香のみとすれば「西では乳香即ち香料使用の衰退は現代香料への轉換であつた。處が現在に於ては南方有用樹脂成分を原料とし化學工業化して、單なる賦香用の匂ひの領域を超へ、新しい化學香料工業が總力戰の資材に重要な位置を占めつつある。)大體樹脂(即ちレジン)は植物の傷口から滲出し空氣中で固形體に變り之を採集するのであるが、バルサムは採取後も尙ほ液狀を呈してゐる。處が諸種の樹脂香料中沈香と稱するものは樹脂分のみが樹木の外部に流出凝固するのではなくて、樹脂分が木質の一部分の組織中に極めて緻密に凝集して居り、その凝集度が高いため、この部分のみは水より重く且つ之を焼くと樹脂分が加熱されて佳香を發するのである。



(イ) 沈香 瑞香料に屬する高さ七十乃至百尺位ひに達する常緑の喬木で、乾枝は灰白色の輕軟狀多孔質であり、全然香氣は無いが、朽木が自然に埋没し木質の一部に樹脂分が濃厚に凝集するか、或は乾枝を伐つて土中に埋没し變化を期待するか、若くは立木に傷をつけて變化を起させるかして香氣に富む部分を探るのである。現在種々の植物學名(例へば *Aquilaria agallocha*, Roxburgh; *A. malaccensis*, Lamarck; *Aloexylon Agallochum*)が比定されてゐるが、要するに香料としては所謂沈香系の香氣に富む香木であればよいので、支那人はこの香氣のみに注目して他を顧みない。

この沈香と稱するものは海南島、印度支那の中部及び南部、印度支那と境を接する泰の東南部臺灣地方、ビルマ、馬來半島、スマトラ、ボルネオ、ブータンヒマラヤ、アッサム、東ベンガル等の山岳地方に産し、印度では要するにガンデス河より以東の地方で早く中世のアラビヤ人旅行者もこの事實を認めてゐる。そして極めて稀に偶然にのみ採取出來たから高價であつたのは前に記した生成の因由によつて明白である。

沈香を始めて知つた民族は誰であつたか、大體私は印度人であつたと思ふ。支那人が知つたのは記録上大體西曆三世紀の初めに遡り得ることは、三國時代の南州異物志にある印度支那地方の沈香の記文で推定が出来る。處がこの支那人は誰から沈香の知識を得たかが問題である。一般に香料は後漢時代に印度から支那に傳つた、そして支那人は香料を南方に求めたと言つてゐる。然し支那人は沈香が

印度に産するとは中世近世まで言つて居ない。後漢書西域傳は諸香・胡椒・薑を天竺産にあげてゐるが沈香とは言つてゐない。この點に就て私は古く佛教の傳來とともに西域を通じて北部印度から香料が支那に輸入され、香料全般の智識が生じたのであるが、この西域傳來の香料は調合香料即ち直ちに使用出来る匂ひであつて原料香料ではなかつたと思ふ。そして時代が経過し且つ支那人の南方智識が増し亦南方の物資が流入するにいたつて、西域傳來の匂ひに對する分析即ち原料の如何を知るにいたり、三國時代には印度支那産の沈香を求め爾後諸原料に就ても同様であつたと考へる。そうでなければ三國時代に吳の地方で匂ひを造る調合技術の存在したことの價値が無くなり、且つ佛教に伴ふ香料の支那傳來の解釋が妥當性を失ふやうである。故に東亞諸香料中の根幹をなす沈香も印度民族から支那人に傳つたと考へるのであるが、西域を経てか或は南方馬來半島を迂廻して伸びた印度文化の東漸による結果か、此點は不明に屬するかと私は思ふ。

この沈香の香氣は大體幽玄澄明な香氣で華麗な甘味を露骨に表現する匂ひでは無く、いささか暗い感じもする。そして樹脂分の凝集度の如何或は生成如何其他に因つて香氣に差別が認められ、沈香だけ一種をとりあげ焚いても匂ひとしての興趣が存するから東洋では特に沈一味をとりあげ、この匂ひを吾々をとりまく自然或は生活現象に結びつけ、この匂ひを發する沈香木に雅銘を附し、その遊びを道にまで高めたのが香道である。そして特に限り無く清い幽玄な香氣を發する沈香木中の最優品が伽

羅即ち奇楠香である。伽羅の名稱は鳥夷志略と我が遊學往來・異例庭訓往來等に始めて出現し夫以前には見出さない。馬來語ジャワ語の *Kalambak* に相違なく、このキヤラムバクの語源は、杉本直治郎氏の研究によると黒色沈香の梵音キヤラアガルの黒(キヤラ)と、木といふ支那語が熟し、伽羅木なる梵漢合成語が宋末か元初に生れ西漸し、且つ伽羅木と稱する優品の沈香が主として占城の一地方のみ産することが知られ、この伽羅木の音が占城地方で *Yanam* の音に變じ支那で奇楠香となつたと考へられてゐる。然らば何故に伽羅の名稱が宋末元初に支那で初めて生れ、夫まで無かつたのだらうか。

宋代の香料の需要が盛大であつたのは事實である。且つ遊戯として種々に香料をもて遊び、調味或は藥用の香料は別とし、特に焚香を中心とする香料の使用が趣味的に廣まつてゐる。宋史(卷二〇五)藝文志の中には丁謂・天香傳(一卷)沈立・香譜(一卷)洪芻・香譜(五卷)葉庭珪・南蠻香錄(一卷)等の如き、前記の目的のための專書が存し、亦元代に諸香譜を集録したと思はれる陳敬の香譜によると尙以外にも專書が存したやうである。かかる趣味上の書の存在は同時に香料趣味の普及を物語るから、沈香に對しても實際の取扱ひ即ち焚く上に深い關心が拂はれ、特に得も言はれぬ優品に黒色のものが多いことから黒沈香木、伽羅木の名稱が生れたのであらう。ここに注意すべきは伽羅に屬する沈香は元代以降に始めて新品が出現したのではなく夫以前からあつたのである。ただ沈香の匂ひを

發現せしめる方法即ち焚方或は觀賞の態度と認識が深まつて特にこの品種的區別を立てる様になつたのである。我國でも同様であることは言ふを俟たない。

(追記)

六朝及び唐代の文化(人)生活は、概して現實生活の甘美を享樂せんと欲する傾向が強く、従つてその趣味は華麗典雅を主とした。宋代に至つて質朴を貴び、清楚を旨とする風開け、茲に華麗な美を否定して天眞の保存を欲する道家的高蹈趣味が擡頭して來た。(中田勇次郎譯考槃餘事の青木正兒博士序文)即ち香料に於ては開元天寶遺事に見る様な現實的な匂ひから、宋代の諸香譜に現はれる清楚で幽玄なもの追求に變つた。我國に於ける平安朝の薰物から鎌倉・吉野・足利時代の沈香一味への變化も亦同一の途を辿つてゐる。

故に宋代には如何にして幽玄な香氣を發顯せしむるかに苦心し、香料の焚き方(即ち隔火を用ひて間接に火熱を及ぼす方法)に種々の工夫をこらし一味の沈香の中に特種な清い香氣を持つ沈香木のあることを發見し、之は黒色のものが多かつたので伽羅木と名づけ特異な香料としたのであらうと思はれる。

尙陳敬の香譜に

迦闌香、一作伽藍木、今按此香、本出迦闌國、亦占香之種也、或云、生南海補陀巖、蓋香中之至

## 寶、其價與金等

と言つてゐる。私は清の雍正年間編纂の新纂香譜の記事によつてゐるが、若しこの文が確實に原著にあつたならば伽藍木の名は島夷志略より以前に存したわけで、占香の一種なりと占城産の沈香の一種に屬することを述べ、香中の至寶にして價ひ金と等しと、正しく言つてゐる。されば伽羅木の名は宋代の香料趣味生活に發してゐると言ひ得よう。

乳香は東洋に主として需要され西方には餘り必要ではなかつた。之は次に記す乳香系の香氣と對比して考へらるべきであつて、要するに西方人の匂ひの嗜好に適しなかつた結果であり、近東商業史の著者W・ハイド氏の如く支那人が南方圏の沈香を殆ど需要したが故に西歐に供給する餘地が無かつたと説くのは誤りである。要は香氣が不向きであつた。されば中世以降漸くその名が傳はり、パウルス・エギネタの醫書に藥品としてあり、中世アラビヤの旅行者が印度支那、ビルマ、馬來の沈香に注目したのも支那人の需要が多かつた結果かと私は思ふ。但しアラビヤ人が沈香を焚いたことは明代馬歡の瀛涯勝覽に記すが如くである。

(ロ) 乳香と沒藥 乳香はボスウエリヤ屬の植物樹皮の傷口から滲出する、乳白色滴乳狀の護謨樹脂で、アラビヤ南部沿岸とその對岸である東アフリカ沿岸に産し、乳香を出す樹種は數種あり、印度にも一種の乳香樹があるが、前者を眞正乳香とすれば後者は偽沈香であり、マルコポーロがタナ王國

産として「白色でない褐色の乳香」といふのは大體後者であらうか。

没薬は種々のバルサムデンドロン及びコミフォラ屬の植物の護謨樹脂で、乳香と略々同一地方に産する塊狀黄赤色のものであるが、この色狀は決して白色或は綠色味を帯びてゐない。そして印度にも同じくこの系統のものがあり前に記した印度産乳香と混交してゐるから、歴史上の諸記録に現れてゐるものを遡源して正確に區別することは頗る困難であらう。

西洋に於ける香料として、最も古いのがこの二つであることは今更ら云ふを俟たないが、焚香料を中心に香膏に或は飲食品に用途は頗る廣かつた。産地の地理上の近接性も大きな原因であるが、今一つは甘美な匂ひを露骨に現はすこの系統の香氣の性質が西洋諸民族の嗜好に合致したためだと私は信じ、前述の沈香と對比して、東西に於ける焚香料の根本的相違、若くは匂ひに對する嗜好の異なる點を見出す。故に西の焚香(*incense*)は乳香であるが、東は沈香であるから、この考へ方を以て夫々の歴史を觀てゆかねばならぬ。處が支那では唐代末から宋代にかけて乳香が諸香料中最も多量に輸入されて居り、支那に於ける焚香料の使用が西方系の影響を多分に受けた時代のあつたことを立證するもののやうである。

支那では西曆三世紀中葉の魏略の大秦國物産中に薰陸の名があり、爾後薰陸香は諸香料中の樹脂を意味する代表稱呼であるが、初期の諸記文は白色のアラビヤ産樹脂其他を意味し大體乳香を中心に廣

く諸種の樹脂香料をふくんでゐたと解してよい。没薬の如きも早くこの薰陸なる名稱に包含され支那に傳つたと思ふが、元來支那人は之を實際香料としては餘り廣く使用してゐない(その實例は香譜其他諸香料の説明を見ても明白である)。後にいたつて主として藥用に供したのみであつた如くである。さて初期の薰陸香は乳香を中心として没薬、印度産の偽品其他をふくんでゐたのが、時代が下るに従つて純粹の乳香のみになり薰陸香即ち乳香となつた次第である。

(ハ) 蘇合香 にはギリシヤ、小アジア、シリヤを原産地とする *Syrax officinalis* の固形レヂン *Syrax* と、西南アヂヤに産する *Liquidambar orientalis* のバルサムで粘液状を呈し灰白色であるが年を経ると透明度を増し暗褐色に變ずる油 *Storax* との二つがある。後者は樹の内皮をはぎとり水と共に釜に入れて煎じ、バルサム分を滲出せしめ、水上に浮ぶ部分を採取するのであるが、後漢書の「合會諸香、煎其汁、以爲蘇合」の文はその時代の文としてはラウファー氏の難ずる如く疑問はありとしても、液狀蘇合香を指すことは考へ得る。亦梁書はこの煎汁説と先箆其汁、以爲香膏と、蘇合香を賦香した香膏を意味するかと思ふものを説いてゐるが、この香膏は或は軟狀の樹脂で、若しかしたら暗褐粘着性塊狀のラダナムではなかつたかとも疑はれる。そして唐の新修本草は固形の樹脂分である蘇合香を説き梁の陶弘景が獅子尿即ち液狀に非ずやとなす考へ方を非難してゐるが、實はどちらも眞に近い。そして固形液狀何れも純品でない偽和品が支那に傳來し且つアッサム、ビルマ、雲南にも蘇合

香類似のものがあるから種々解釋に混雜を來したのだと思ふ。

亦この蘇合香は始めから乳香系の樹脂即ち薰陸とは別に解されてゐたやうで魏略は既に薰陸香以外に蘇合香の名をあげてゐる。そして用途は主として香料であり且つ陶弘景が合香家要用と説く如く諸香料の調合に供されてゐた。

(二) 安息香 *Styrax Benzoin Dryander* 外數種の安息香樹はスマトラ、マラッカ、ジャワに分布し、佛印ラオスよりトンキンに至る山中に *Styrax tonkinensis Craib* 外一種がある。之等の樹脂が安息香で前者は所謂スマトラの安息香、後者が泰國の安息香である。

之は十四世紀のアラビヤ人旅行家イブン・バツタが *Tuban Jawi* 即ちジャワ(スマトラ)乳香として紹介するまで西方に知られず、彼以後は東方の乳香としてその價值が認められ、アラビヤ語 *Tuban Jawi* はポルトガル語の *benzawi, benjoin* となつて今日の歐洲各國語に變轉してゐる。亦非常に甘いこの香りは忽ちにして西洋人の嗜好に適し、ポルトガル人が印度に到達する以前既に早く地中海の諸港に輸入され、アラビヤ産真正乳香と對等の勢力を示し後には乳香以上に焚香に使用したこともあつた。

支那人がこのベンゾインを意味する安息香を十分に認識したのは早くて唐末大體宋代のことであつた。唐末の西陽雜俎は安息香を波斯産と云ふがその内容は完全にベンゾイン樹では無い。西曆十二世



紀中葉の葉庭珪の南蠻香錄が三佛齊地方の安息香と眞臘地方の金顔香を記してゐるのが正確なもの  
最初であらう。三佛齊産即ちスマトラ品であり、後者は泰國産を意味し且つ金顔香(Kin-yen-hiang)は  
馬來語 kemenyan の對音ではなからうか。葉氏の記事が諸蕃志に於て尙一層確實な説明となつてゐる。  
然し葉氏に於て既に二種の安息香の説明があるから、之以前に支那人が南海産ベンゾインを知つてゐ  
たと思はれるが、正確には何時頃まで遡り得るか記録上多々疑問がある。

尙支那人の云ふ安息香なる名稱は、史記及び前漢書に見える西方パルチャ國のアルサク王家の支那  
音安息であるから、名稱そのものは稍もすれば西域關係の香料に非ずやの感を抱かしめないでもな  
い。然し唐末以後の安息香が嚴格に今日の安息香を意味することは前述の如くである。安息に香を附  
した安息香の名は古く晉書佛圖澄傳に水を求めて祈願するに焚いた香料とあり、隋書・魏書は龜茲國  
産にこの香名をあげ、宋書列傳にのせる范曄の和香方の序には種々の香料中に安息香がある。之等か  
らして西域系の香料のあるもの(一種の調合香料か)に古へのパルチャ王家の名を附した香料名であ  
つたと思はれる。ペリオト氏は印度産乳香の一種に非ずやとする考へを記してゐるが私は今それにふ  
れない。そして唐末の西陽雜俎が安息香を波斯産とし凡そ南海産眞正安息香とは縁の遠い樹の説明に  
終つたのは、かかる西域系の漠然たる考へ方から、前記した南海産安息香に移る過渡期の現象を示す  
ものかと私は今考へたりしてゐる。

(附記) ペルシヤを原産とする *Perceclanum* 屬植物のゴムレデンであるガルバナムと、小アヂヤ地

方のシスタス屬の數種の眞正レデンであるラダナムは東方との關係が薄いから今は略す。

南方圈一帯に廣く産出するダマルは元來塗料に供するものであるが之を焚くと抹香臭い匂ひがし、大量且つ安價に得られたので宋代以降香料としてもあげられてゐる。篤耨香(*Tunau-kiang*)が之で、馬來語 *damar* は瀛涯勝覽のマラツカの項に打麻兒(*tamar*)と書き船底塗料に充つといふ。葉庭珪の香録が最初の記録かと思ふが唐代の種々の南方産樹脂中には随分このダマルが混交してゐたことは想像に難くない。

## (二) 材の匂ひ

木材の中に含まれる香氣を香料に供した主たるものに龍腦及び樟腦と、今一つは白檀がある。

(イ) 龍腦と樟腦

スマトラ、ボルネオ、馬來半島に生育し、高さ數十尺、直徑數尺に達する巨大な喬木で、密林中に一きは高く聳ゆる龍腦樹(*Dryobalanops Camphora* Colebrook (*D. Aromatica*, Gaerten))の髓竇の間隙奥深くに結晶してゐる白色の芳香分が龍腦香である。即ち龍腦樹の材そのものではなくて樹中にある芳香分の天然白色結晶であるが之は樹脂ではない。故に龍腦樹を伐り倒し解板して龍腦を採らねばなら

ないが、結晶分は極めて少く、亦結晶状態の美麗なものは尙稀であるから、従て非常に高價につく。この結晶状態と色状の如何から梅花腦、金脚腦、米腦或は雜物(木屑等)の混入等から蒼腦等の商品上の區別が生れる。亦龍腦樹が多分に油分を含有する時は、樹に傷をつけてタツピングをするか若くは全樹を伐倒して自然に湧出する油を採取し得る。之が龍腦油で、結晶體の龍腦と區別して考へねばならぬ。唐の新修本草と西陽雜俎によれば當時の支那人は既に

龍 腦——樹の瘦せたものの根中乾脂

婆律膏——樹の肥へたものの根下清脂

と區別し、前者は天然結晶體である龍腦、後者は龍腦油を意呼し、又西曆九世紀のアラビヤ人旅行者イブン・コルダドベトはスマトラ地方に龍腦と龍腦油を産するのを語り、イサク・イブン・アムランも同様であるから、東西を通じ結晶と油の二品が知られてゐたわけである。この婆律膏(Po-li)の名は梁書の狼牙脩國産に始めて見へ、西陽雜俎の固不婆律(Ku-pu-po-li)とともに、所謂龍腦の最も高名な産出地であつたスマトラのバルスなる地名に由來するか、或は梵語の Karpura の省略音か、東西の學者間に唐代の波魯師國と關聯して對立した見解を生み、未だ決定的解釋に到達してゐない。ただ何れの學者も從來支那語の婆律、梵語カルプラ、アラビヤ語 Kafur の音と、唐代の支那人がバルスに關する正確な智識があつたか否かのみにとらはれ、結晶と油の品種的區別からこの問題に論及され

ず、私としてはこの事が解決の鍵を或は藏するものではないかと思ふ。梵語 *Karpura* が種々に轉訛し西藏語 *ga-bur* に至る變化は認められるが、支那で梵音だとする羯布羅 (*kie-pu-lo*) とは、その間に若干の經過地がなければならぬ様で、從來の如く *Karpura* を以て羯布羅に充てるには相當難色がある。且つ印度には龍腦は無い。肉桂樹の如く樟科系に屬する香氣高いものがあるのみだから、大唐西域記が南印度の白檀と共に記す羯布羅香が何處の龍腦を指すか、嚴格には慎重な研究を前提に置く必要があらう。

この龍腦は香料としてよりも寧ろ高貴醫藥品として支那人に喜ばれ、或は南支以南の民族には檳榔を嚼む際の賦香品として、亦龍腦油は身體に塗る高貴な品として愛賞されてゐる。尙ほ龍腦の西方傳來は中世以後で古代ギリシヤ及びラテン語には夫に當る語を缺き、コロンや西曆六世紀初めのキムル・カキスの詩に名はあるが、六世紀の終り頃アラビヤ人は鹽と間違つた話も傳つてゐるから、大體七世紀以降から正確にアラビヤ人に傳はり、西方諸國に傳播したと思ふが、夫も主として醫藥であつたこと勿論である。

樟腦は中南支、臺灣、日本に生育する樟腦樹 (*Cinnamomum Camphora*) の芳香腦分で、龍腦の如く樹中の天然結晶物では無く、何等かの人爲的方法を加へて腦分を採つたものである。樟樹自身の歴史は頗る古く、漢代既に支那人は中南支の樟材を棺材に使用してゐることは、記録の上にも亦考古學上

からも立證され、亦船材として尊ばれ、我が古事記、日本書紀とも親しみのある芳香植物である。この佳香に富み、且つ芳香成分を有するが故に耐久性を有し保存に便な材が生活上廣く用ひられたのは事實である。そして龍腦の如く幽雅で強くは無いが龍腦に近似するこの材の香氣を何とかして利用したいとは、龍腦が極めて高價で且つ手に入り難かつた時代には誰しも考へたことであらう。然しこの考へが實現したのは中世のことであつた。即ち龍腦の代用香料として出現したのである。

夫では樟腦の製造が何時支那に始つたか。元代のマルコ・ポーロは福建の樟樹を「樟腦を産する樹」と言つて居り、明初の瀛涯勝覽と星槎勝覽は南印度沿岸地方の支那よりの輸出品中に樟腦をあげてゐるから、既に元代から製造が始つてゐたのは事實に相違ない。從來の學者は夫を遡る遠からぬ以前に製造の起源があつたらうと憶測するに過ぎず、支那に於ける樟腦製造の技術が如何にして生れたか、或は何處から傳播したかの點を明白にして居ない。宋代の葉庭珪の香錄や諸蕃志を見ると、龍腦樹を伐り解板して結晶體を取つた後の材片を、細かく碎いて細片にし、密閉した釜の中に入れ熱灰であたためると、腦分は昇化して釜の蓋の裏面に凝結する、この塊狀の腦分が熟腦だと言つてゐる。之は人爲的に龍腦を採取する一步進んだ方法であるが、この方法を支那本土の樟腦に應用し樹の細片を水に浸し釜に入れ盆狀のふたを置き、密封して加熱し、蓋の内部に樟腦分を結晶させたのである。こ

の場合水中に浸すことは加熱上の技術に火を焚くことを容易ならしめ釜の中のものを焦すことなく、昇化した腦分の香氣は焦げ臭みを帯びない。私は宋代の南方に於ける龍腦採取技術が同代末か元初に支那本土の樟腦製造技術となり樟腦の出現を見たものと思ふ。樟腦製造方法を記す明初の本草品彙精要を見ても、その後の本草綱目に於ても製法はこの昇化法である。之は早くテオフラスタスに始り中世のアラビヤ人が用ひた蒸溜法で無いことは注目すべき事である。故に蒸溜方法による樟腦油の出現は漸く近代末であつた。

(追記) 宗の仁宗の嘉祐六年(西曆一〇六一)に編纂を終へた圖經本草は「今海南龍腦、多用火燭成片」と簡單であるが早く熟龍腦製造技術の存在を語つてゐる。亦陳敬の香譜は龍腦の項に「陳正敏云、龍腦出南天竺、……………日久木乾、循理折之、其香如雲母者是也、與中土人取樟腦頗異」と天然結晶龍腦の採取が支那の樟腦製造と非常に異なることを説明した句を引いてゐる。この引用が陳敬香譜の原書に始めから存したとすれば、樟腦なる語は宋代に存し、且つその製造が既に始つてゐたことを立證するものである。故にマルコ・ポーロの樟腦を産する樹の記事も正確なわけで、支那の樟腦製造起源は宋代に求め得よう。

やがてこの樟腦製造方法は豊臣秀吉時代前後に支那から我國に傳はり、九州地方の樟樹は腦分の含有率高く昇化率がよかつたから、急速に製造が盛大となり、日蘭交易の當初から大量に輸出され、支

那品を壓倒し、支那の需要は勿論、遠く西歐までも供給する有様であつた。處が其の製法は依然として前記の昇化法で徳川時代の末期まで繼續したことは諸種の本草物産書或は記録の明示する通りである。

(ロ) 白檀

南印度のマイソール、コインバートル、北カナラ、マドラス地方の乾燥高地帯に生育する *Santalum album* 樹の材が所謂真正の檀香木で、白色のものが代表的であるから白檀の名稱が生れた。亦同種若くは類似の樹が香氣の強弱、佳悪はともあれ南方一帯に廣く生じ、特にスムバ、チモール島の白檀は有名であつた。

梵語の *Chandana* は東西に傳播して各國語となり支那では栴檀と稱したのである。この樹は元來藥物上の効能が著しく粉末にして患部に塗り或は服用する、そして古代の印度人と最も密接な關係を、香藥として有するものであつた。だから諸々の佛典に香料中最も多く現はれる品名である。

支那には早く法顯傳に栴檀の名があり大唐西域記其他マイソール地方の白檀の記事が明白に紹介され、且つ別名を與藥としあげ、その藥效を十分に認識してゐる。そして唐代の本草書は漠然と南方地方に産すとしてゐるが、宋代にはスムバ、チモール島の白檀を認識してゐるから、唐末以降の支那の白檀は主としてこの地方産品であつた。又彼等は黃・白・赤(或は紫)の三種をあげてゐる。黃と白

色品が今日の白檀であることは間違ひない。赤（紫）檀即ち赤梅檀が南部印度産の紫檀の心材を明確に指してゐたかどうかには就ては頗る疑問があつてデュアルテ・バルボサ或はガルシヤ・ダ・オルタ等が印度の赤梅檀即ち染料・食料・薬用に供するものとするのと、支那人が特に珍重して貴重な香料と見做した赤梅檀と同一物であつたかは尙深く研究を要する問題であらう。香木の赤梅檀には往々極めて樹脂分に富む一見沈香に類するかとも思ふ品さへあるから。

白檀樹は一種の半寄生植物で根に小さい珠粒があり、それで近くの植物の根から養分を吸収して生活してゐる。故にホスト・プラントの存在如何に依つて樹の成長が左右され、且つ香氣の優劣が生ずる様である。この點に關し觀佛三昧經に梅檀は伊蘭と云ふ臭草の叢中に生じ、この臭氣を消して二葉より妙香を放ち成長するとあるのは、漠然ではあるがホスト・プラントの事を記してゐると私は思ふ。亦「梅檀は二葉より芳し」の句はこの事實に由來してゐる。

西曆一世紀のエリュトラ海一覽に印度白檀のペルシヤ灣岸への輸出があり、西方地方で薬用に供されたのは事實であるが、六世紀のコスマス・インデコプレウステス以後その記事は特に多い。又中世の西方よりの旅行者がこの白檀と共に赤梅檀に注目することが多かつたのは食料の調味、染色料として特に彼等の需要が多かつた結果だと考へられる。



## (三) 樹皮と根

## (イ) 根の匂ひ

草類のある種の根或は根莖は特異の味と刺戟と香氣を有し、甘松香、イリス、ユスタス、ジンヂャ  
ー、薑等はその代表で、各々の特異性を活用して廣く食品の調味賦香に用ひ食欲の増進と味覺の快を  
増すと共に、或は身體の外部につける匂ひに又は保健藥劑として、更らに焚香にも供した。

草類の芳香に富む根の中で味覺即ち調味を目的とせず、主として嗅覺と藥用に供するものにベチバ  
ーがある。之は *Vetiveria Zizanioides* を主とし、廣く印度、ビルマ、セイロンの沼澤濕潤地域に生育  
する。ベチバ―草の根を織布に製して室内に懸け濕氣を與へると、佳香を放つから趣味上に廣く印度  
で使用し、亦乾燥根を焚香に或は藥用に充てる。印度人とベチバ―根は随分古い歴史を持つてゐるや  
うだが、支那でも茅草の根と言つてゐる。法雲の翻譯名義集に梵語を鹽尸羅 (*Usira*) と當ててゐるの  
は金光明最勝王經に依據したやうに私は解したいが、ベチバ―は印度で *Khas-khas* と稱しウシラが印  
度の古語の何れであるか未だ詳しく調べてゐない。ただ本草衍義には、本草は茅の如く根は浴場の賦  
香に或は焚香に佳なりと正確にベチバ―根を指してゐることを注意するに止める。

又印度ヒマラヤの高山地方一帯に生育する *Nardostachys Jatamansi* 草の地下莖を使用する甘松香が

ある。この地下莖は薬用及び薫香に供し、印度では頭髮の成長と漆黒を助長する薬品の賦香に用ひる。梵音は *nalada* で古代の印度人に親しみ深く、ヘブライ語 *nerd* ギリシャ語 *nardos* ペルシャ語 *nard* となつてゐる。翻譯名義集の那羅陀 *na-la-da* は正しく梵音を寫してゐるが、古く隋書に康國の香料として賄香及び阿薩那香をあげてゐるのは、太平寰宇記が康國の甘松香と阿薩那香とするに當り、ラウファー氏の詳論する様に甘松香であらう。西方にはアレクサンダー大王の遠征以後廣く傳はつたやうで、プリニーが當時ローマの香膏は、甘松香賦香品を以て最上とするとして記してゐるのは、新約聖書マコ傳の記載と相俟ち事實であつたらう。尙支那人は西南山岳地方から出て蜀に集る様にも言つてゐるが之は印度ヒマラヤ産の類似品と見なされ、矢張り根莖であつた。故にこの根を水に浸し浴すれば身體を芳しからしめるのであるが、印度品よりも早く入手出來たから水に香氣を移すことが容易であつたためである。西のプリニーもナルドは新しい品ほど香氣が強いと言つてゐる。

(ロ) 肉 桂

樟科植物に屬する肉桂樹の樹皮、嫩枝で、頗る佳香に富む甘辛な味と強い刺戟に富み、調味賦香を主とすると共に焚香に、或は油脂に匂ひを吸収させて香膏に使用する。南支、印度支那、南方圈、印度、セイロン、ビルマ各地に産するが南支とセイロン品が代表で、現在通俗にセイロン品はシンナモン、南支品はカツシヤと區別し、前者が優ることは事實である。

肉桂の歴史は東西ともに頗る古く、且つ印度より以西の地方には全然生育しないから古代西方文化諸民族が使用した肉桂は印度より以東の地方から輸入したのは事實である。そして古代ギリシヤ時代からカツシヤとシンナモンの商品上の區別があつたから、從來多くの學者は、この古代の區別に早速現在の商品上の區別を援用し、西曆紀元一世紀前に既にセイロンのシンナモンと南支のカツシヤが傳播したと考へ疑はなかつた。之に對しラウファー氏は支那の肉桂が西曆紀元前に西漸し得べからざることを東西交渉上の歴史より説き、且つダルシネと言ふ支那の木即ち肉桂を意味する波斯語は中世波斯語で古代語ではないから、漫然と支那の木なる波斯語を以て支那肉桂の古代西方傳播の證左とする不注意をとがめ、又セイロン肉桂は記録上よりすれば中世以後に始めて現はれるのであるから、古代西方の肉桂供給地は印度マラバル沿岸であらうとしてゐる。岡本良知氏は古代支那肉桂西漸説をラ氏と同じく否定し、セイロン肉桂の出現を中世以降と詳細に論じ、古代西方民族使用の肉桂にはマラバル産品と共に馬來半島より東の地方、所謂南方圏の肉桂があり、従つて品質上の區別が生じたものであらうとの假説を提唱し、且つラ氏が晉代の南方草木狀を以て南支那肉桂記録の始めとするのよりも遡つて支那人の南支肉桂の發見使用を立證された。私はラ氏、岡本氏の古代南支肉桂西漸説に賛すると共に、岡本氏の言ふ南方圏肉桂がすくなくとも西曆紀元一世紀前後には西漸したりとの假説には反對の考へを表明した。夫は南方圏肉桂の商品上の價值が現在に於ても過去に於ても極めて低いことに

立脚してゐる。現在は餘り問題にならぬが假りに過去に於て商品上の價值があつたならば記録の上に相當現はれる筈であるのに事實はそうでない。且つその品種は肉桂種に屬しても頗る多様で、中には商品として價值のあるものも存するが、南支産とマラバル産に比し大體劣る様である。然し岡本氏はこの問題に就て尙深く他日を期して居られ私も尙研究すべき問題であると思ふ。私は古代西方肉桂の品種的區別は印度マラバル産品とともにガンヂス河以東よりビルマ地方にかけての肉桂類似品を含んだためか或はマラバル品中の品種的區別かと考へてゐる。何れにしても古代西洋肉桂の品種的區別が現在の區別と同一でないこと丈は確信を以て言ひ得ると考へる。

#### (四) 花

##### (イ) 花

花の香が古く香料として注目されたのは誰しも首肯する處であり、種々の草花をあげ得るが、若干著しいものを拾つて見ると、先づ西方のナルシツサスがある。古くテオフラスタス、デオスコリデス、プリニ一の説明があり、西陽雜俎が佛林國(シリヤ)産の襟祇 *Narcissus* と言つてゐるのは中世波斯語の *nargis* アラビヤ語の *narjis* に當り、花を壓搾して香氣に富む油を採り身體に塗るといふ。

ペルシヤ原産のジャスミンと印度のジャスミンは佳香を放つ花として高名である。支那で前者は素

馨、後者は茉莉と言ふ、そして中世波斯語の *Yasmin* 或はアラビヤ語の *Yasmin* は支那に傳はつて耶悉茗花の名を古く南方草木狀に止めてゐるが、本書の記文は後代の追加偽作のやうで、ヒルト、ロツクヒル兩氏、藤田豊八博士は南方草木狀のヤスミンの語の存在を以て、晉代南支那に波斯人或はアラビヤ人の傳來をも立證せんかとの勢ひであるが、之はラウフアー氏が難じたやうにいささか無理であらう。支那に於けるヤスミンの名は大體唐末以降とするのが穩當で、左すればアラビヤ人の傳來と一致する様に私は考へる。茉莉は印度のジャスミン即ち梵語の *malika* が馬來半島を經由して植物と共に南支那に傳はつた名である。

ローズ即ち薔薇は種類頗る多く、この歴史は漠としてゐるやうだ。香りの高い薔薇の匂ひを賦香した香膏(油)を用ひたことは既にホーマーのイリヤッドの中に歌はれ、デオスコリデスはローズ油を語つてゐるが、この油は正確にローズの精油を意味したものでなくて、水面に浮ぶ花瓣から流れ出る油分を採集したものに過ぎなかつたと推定される。ローズの香氣のみ即ち精油の蒸溜は西曆十三世紀のギリシヤの醫者 Joannes Actuarius の記録に始まり、ペルシヤでは古くから薔薇水はあつたが精油の蒸溜は大分後代に屬するかと思ふ。薔薇水は薔薇の花上の露を集めたものだと支那人は記してゐるが、今日のローズ蒸溜の際の残渣であるローズ・ウォータとは全く異なつてゐる。私は往時の波斯の薔薇水の製造に就て今正確になし得ないが、宋代の大食の薔薇水は「翻搖數回、其泡因上下者爲

眞」とある位ひだから蒸溜した純品のローズの精油でないことは考へられる。若し純品であれば油分のみでそう泡も立たない筈だし、且つ寒冷の候は大體凝固して液状を呈さないからである。

原産地はギリシヤ、小アヂヤ、ペルシヤと言はれるも、古く東方に擴がり或は原産地は不明かとも稱されるサフラン花の柱頭は香料、藥用、染色調味料に廣く使用された。このサフランを支那人は鬱金香と言つた。鬱金が何であるかに就て從來諸學者は迷ひ種々に比定したが、染色に用ひる鬱金と鬱金香は全然異なり、後者は早くワツタース氏が大唐西域記に述べたやうに、この支那音 *Yuh-chin* の古音は *Guh-kum* で、梵語にサフランの一種を *Kuikuma* と言ふのに當る。梁書(卷五四)は「鬱金獨出罽賓國、華色正黃而細」と云ひ、玄應が一切經音義に「鬱金此是樹名、出罽賓國、其花黃色、取花安置一處、待爛壓取汁」と晉魏代の罽賓即ちサフランの善く生育する北部印度のカシミル地方を指してゐるのは鬱金香のサフランであることを善く立證する。この論證は我が白鳥庫吉博士の罽賓國考に詳しい。

(追記) 南州異物志の「鬱金者出罽賓國、國人種之、先取上佛積日萎焯載去之、然後取鬱金、色正黃云々」(太平御覽九八二)といふ説明は隋書や一切經音義の先蹤ではあるまいか。又説文の「鬱香草也」及び周禮の鬱は正確にサフランを指すものでないと私は今考へてゐる。

梔子は梵語の *Champaka* (*Michael Champaka*, *Gardenia Florida*) で、支那に移り瞻博迦(*Chun-po-kia*)

略して瞻蔔(tan-po)は正しくその對音であると從來諸學者は稱してゐる。唐宋代の瞻蔔が梵音の梔子の轉訛であることは正しく認められるが、夫では史記貨殖傳の「千畝卮茜……此其人與千戶侯等」とするものと同一であるか否か、私は尙深く考ふべきで、後代の本草書が梔子を卮子に當て史記の文を引くのはどうであらうかとも思つたりしてゐる。

(ロ) 花 蕾

花蕾としてあげるものは丁香である。モルツカ群島が原産地で、歐人の東漸する以前まで原産地以外には何處にも生育しなかつたとするのは大體妥當であらう。亦このモルツカ群島中のチドレ、テルナテ、モルチル、マチアン、バチアン等が原産地であらうかと稱されてゐるが、現在此等の地方には野生種を見ず詳細な原生地域は或は不明に近いかも知れない。丁香の花蕾は樹上では青いが採取後乾燥すると茶褐色に變じ、その形狀が丁字の如くであるのと、鶏の舌に似てゐるので丁香(子とも書く)或は鶏舌香の名稱を生んだ。

丁香の歴史は古く、西曆紀元一世紀前後には東西兩洋に傳播した。夫に就ては嘗て岡本良知氏が詳細に論じ、更らに現在同氏は舊論を根本的に改め近く發表される筈であるから私は今くどくしく述べない。たゞ支那人の言ふ丁香の種類を見ると鶏舌香は丁香の大きなもので宋人の言ふ丁香母であるから、花蕾ではなく、開花した丁香を指してゐる様に思はれ、且つ香氣も蕾の丁香に比し劣る。花蕾

が香氣の點に於て優るのを知つたのは後のことで、古くは開花したのも蕾も一緒に採取したから、かやうな品種上の區別が必要であつた。この丁香は刺戟性と防腐性に富み飲食品の賦香と保存に最も適するから、支那人は酒に西洋人は食料特に肉類の保存上切に需要した次第である。

我國では始めは主に焚香用と藥品に充て、食料賦香品としての用途は少なかつた。故に慶長元和年代に渡來した英國人は我が丁香の需要すくなしと斷じてゐる。處が徳川時代に入ると丁香の輸入は相當多量に上り、幕末獨人シーボルトの日本貿易計畫中の重要輸入品に上つてゐる。之は伽羅の油即ちピンツケが流行して賦香用の丁香を必要としたことと、藥品其他に廣く使用したのに原因するが、それでも飲食品の賦香はまだ問題ではなかつた。亦丁香を輸入し蒸溜した丁香油の製造も堺に行はれてゐた。丁香油の用途には媚藥として或は道中雲助の身體に塗る保温目的があつたりして苦笑することもある。

## (五) 葉

### (イ) 茅 香

草類の葉で芳香に富む一群に、印度を原産地とし廣く南アヂヤに分布するシムボポゴン屬のシトロネラ、レモングラス、ジンジャーグラス（之に類した或は下品のパルマローザ）等がある。之等は何



れも茅に似た形状のもので、殊にシトロネラとレモングラスは非常に近似し且つ混交種が多いから現在でも稍もすれば正確に區別出來難い状態にあることが多く、南方に廣く生育する佳香を放つ茅即ち香ひ茅（茅香、香茅）として知られてゐる。ワット氏はプリニーが印度の芳草類を意味するものを記すと解してゐる位ひであるが、論者によるとギリシヤのデオスコリデスは之等の芳草類を薬用、香膏用、焚香用に供するものと言つてゐる。殊にジンチャイグラスはローズに似た香氣を放つから特に古く西方人の注意を引いてゐる。支那人は茅香と稱して種々のものを意味し特に南支、安南産に注目したのは餘り遠隔の地方から輸入したのでは古くて香氣が失はれて了ふからであらう。この支那人の言ふ茅香が今日の植物分類學上如何なるものに屬したかは頗る興味ある問題であるが、比定は頗る難事に屬し私は香草の考證に今後を期せねばならぬ。佛典に茅香を修業の座に敷くと虫害を防ぐ效あるも修養の足らぬ者は足を傷けるといふ。即ち茅の葉が銳角を呈するため足を傷ためることを意味し、この點レモングラス草はシトロネラ草よりも銳いから、大體前者を用ひたのではなかつたらうかと推定し得て面白い。我が佛教の盆祭りに際し茅で編んだ敷物を造つて、佛前に具物の下敷きにするのは印度人と茅香の生活の餘影でもあらう。そして平安朝の頃から體身香に用ひてゐるのも印度、支那を経て傳つた風習である。

支那に於ける葉の香料の代表は藿香である。南支那産の *Lophanthus rugosus* (排香草又はかわみどり)の葉及び莖を採り乾燥保存して焚香、體身香、薬用に供するも、元來鈍重な匂ひで諸香料を調合する際香氣の發散度を押へる安定保留劑の效能を持つてゐる。古く南州異物志は扶南に産し(吳時外國傳亦同じ)「以著衣服中」と言ひ、南方草木狀の記載をそのまま信ずれば當時交趾地方では既に栽培を見、大體印度支那産を始めて使用し、次で南支一帶に繁殖する様になつたものかと思はれる。楞嚴經の兜婁婆、法華經の多摩羅跋香、金光明經の鉢怛羅羅といふに當るとも言つてゐるが、印度のボムベイからベラル南方の中央部と西部一帶に現今のパチュリ草(*Pogostemon Heyneanus*)に屬する種々の香草があるのを指して居り、夫等の梵音の比定は輕々しく斷ぜられない。パチュリ草は現在スマトラ、馬來、ジャワ産を優とするが、この香氣は支那人の藿香と殆ど近似し往々藿香即ちパチュリとも見なしてゐる。尙私は餘談であるが支那人は五行説に基いて香料を分類し

(一)根(梅檀)

(二)節(沈香)

(三)花(鷄舌即ち丁香)

(四)葉(藿香)

(五)膠(薰陸即ち乳香)

と一本の木の根、節(幹)、花、葉、膠(樹脂)であると考へた事實に注目し度い。この考へ方(分類)は西曆四世紀の中頃か末頃、恐らく交趾に居つたと思はれる俞益期の牋に先づ記され、梁元帝の金樓子の文で擴まり、唐末の酉陽雜俎に至つても依然として存してゐるほどである。或意味では白檀、沈

香、丁香、藿香、乳香が焚香(薰香即ち incense)を主として眺めた植物性香料の支那に於ける代表でもあつた。

(ハ) 薄 荷

薄荷系に屬する草は頗る多く就中所謂薄荷の香氣を出すものは日本、支那、北米、英國が現在主たるものである。日本の薄荷は大體支那(朝鮮を含む大陸)系統に由來すると考へるが、然らば支那の薄荷は支那原生のものか否か、此點多くの疑問が存しても、一應は原産地を北中支那地方とするものと、朝鮮からの傳來品若くは他地方(即ち西域及び南方)より傳播した品種が互ひに混交して現在に及んでゐると考へ度い。支那語の薄荷 *po-ho*, *bak-xa* と胡荽蘭、蕃荷 *fan-ho* 等より左様に推定する。尙ペルシヤ語は *puđene*, *puđina*, *budenk* で支那の *poho* (*bakxa*) とは關係なく、西方薄荷(所謂西洋種)の起源に就て從來何等まとまつた所説を聞かない。藥用及び調味賦香用として貴重な薄荷の歴史の系統立つた記述を欲すると共に、私も亦現在何等私見を述べる智識を有せぬことを残念に思ふ。

(二) 零陵香

此香草は廣東湖南地方に産する *Commarouna odorata*, *Aubl.* の莖や葉で、薰劑に供するものであると稱されるが、早くスチュアート氏が(スミス支那藥物志の増補改訂版) *Melilotus Arvensis* と比定してゐるし、正確な植物學名の考定は或は困難であらう。まして往古の零陵香に就ては尙更らこの感が深い。夫はスチュア

ト氏も述べる様に香草を支那人は薰、蘭、麝の文字を用ひて勝手に形容し嚴格な植物上の區別より寧ろ香氣を目的として居り、もと零陵地方から産した薰草即ち零陵香であるから、従つて種々の香草が時代の變遷と共に供給された次第である。南越志に「一名燕草、又名薰草、生零陵山谷、葉如羅勒」と *Ocimum basilicum* の如しとも言ふてゐるが、體身香（浴場に用ひ）或は薰香の配合劑に用ひたものである。

(ホ) 艾納香

龍腦草又はダイワウソウとも稱する *Blumea balsamifera* D. C. は南支一帶に生ずる向日葵屬の巨大植物で、之を壓搾して製造する龍腦を艾片、結片、ブルメリヤカムフェルと云ひ、所謂艾納香とするものである。主に海南島に産し龍腦の下等品として殆ど支那本土の藥用或は製墨賦香に用ひる。處が支那の本草書の言ふ艾納は唐代の廣志が「出西國、似細艾、又有松樹皮上綠衣」と二説を提唱し、その效能は「可以合諸香燒之、能聚其煙、青白不散」となす様に極めて香氣の發散度の低い焚香料で今日我々が真正艾納香とするものとは大分異なつてゐる様に思はれる。後代まで艾納の説明は依然として廣志の範圍で（例へば廣群芳譜に於ても）私は海南島の艾片が何時頃出現したか明白に立證し得ないが之は極めて新しいものと考へ、支那人の言ふ過去の艾納は今日の *Blumea balsamifera* D. C. の艾片ではなかつたとするのが妥當と信ずる。そして正確な植物名の考定は至難であるが極めて香氣の發

散度の低いことなどからバルサム分を多分に含有した草であつたと考へる。この點現代のオイクモス  
レヂン系統の如く或は地衣類に屬するものではなかつたかとも言ひ得るが、夫ではいさゝか不備でも  
ある。

### (六) 果實と種子

#### (イ) 胡椒

プリニーは博物志 (XII 14) に “It is quite surprising that the use of pepper has come so much  
into fashion, seeing that in other substances which we use, it is sometimes their sweetness, and sometimes  
their appearance that has attracted our notice; whereas, pepper has nothing in it that can plead as a  
recommendation to either fruit or berry, its only desirable quality being a certain pungency; and yet  
it is for this that we import it all the way from India! Who was the first to make trial of it as an  
article of food? And who I wonder, was the man that was not content to prepare himself by hunger  
only for the satisfying of a greedy appetite?” と胡椒特有の峻烈な香氣と辛味が飲食品の調味に缺く  
を得ない次第となつたことを不思議がつてゐるが、當時印度東海岸よりローマに運送した商貨の四分  
の三は胡椒であつたと云ふ。即ちトラバシコネとマラバル地方に原生した胡椒科 (Piperaceae) に屬

する多年生植物の果實である胡椒は梵語 *Pippali*、ギリシヤ語 *peperi*、ラテン語 *piper* である。然し西方に廣く傳播したのはダリウス治下のペルシヤ王國の版圖擴大と大體時を同じうしてゐる。そして西曆紀元前四世紀のテオフラスタスに始めてその名が藥物として記され且つ黒胡椒と長胡椒の區別があり、デオスコリデスにいたつて前記の黒と長胡椒以外に白胡椒を加へ三つの品種的區別になつてゐるが、彼等は大體白胡椒は黒胡椒を生ずる胡椒とは別種の胡椒樹から採るものと考へてゐた。この品種的區別は同時に胡椒に對する需要の擴大を意味する。

(註) 黒胡椒と白胡椒は實際は同一品種である。即ち黒胡椒 (*Piper nigrum*) は果實を稔熟前に採取して乾燥するもので、果穂中二乃至三果が赤熟した時に果穂ごと摘み取り、これを沸騰した熱湯中に浸漬して果皮を黒色ならしめ蓆に擴げて手で揉みつゝ花軸を去り、そのまま乾燥し又は燻煙室を設けて人工的に乾燥したものである。

夫から果穂の殆んど全體が赤熟した時摘み取り花軸を除き、數日間水中に浸して果皮を柔かくしてこれを去り、水洗後陽乾するか或は黒胡椒を機械を用ひて果皮を去つたものが白胡椒 (*Semen Piperis album, Piper album*) であつて、黒胡椒に比し香味は頗る佳快である。

以上は現在の製造方法で古代からかくの如くであつたとは斷言出來ない。大體黒胡椒は果實を熟成前或は熟成した時に外殼とパルプの着いたまゝ摘み取つて乾燥したものであり、白胡椒はこの外殼とパルプを取り去つた程度であつたかと思ふ。そして果實を熱湯中に入れ變色し醗酵させることと(即ち黒胡椒)、數日間水中に浸漬し陽乾する(即ち白胡椒)が如き前記の製法が古代に存したかどうか疑問であるが、然らば何時頃からであつたか私は現在深く調べてゐない。但し白胡椒の出現は採取果實の天然乾燥品に過ぎなかつた黒胡椒に何等かの加工技術の發生したことを意味すると私は思ふ。

蔓性の *Piper Nigrum* に對し灌木狀の *Piper longum* L. (印度原産)と *P. officinarum* L. (ジャワ原産)の二種から成る。通常長胡椒と稱する乾燥果穗がある。現在の歐洲語の胡椒を意味する源泉である梵語の *pippali* は實にこの長胡椒を意味し、現在胡椒(*pepper*)と言へば黒胡椒を指すのとは若干異なり、長胡椒が古代では仲々勢力があつたやうで、プリニーは當時のローマの胡椒一卦度の値段を「長胡椒一五デナリ、白胡椒七デナリ、黒胡椒四デナリ」と各々の品位を表示してゐる。又長胡椒の *pippali* は支那では隋書に畢撥(*pi-po*)とし西陽雜俎に畢撥黎(*pi-po-li*)と傳はつてゐる(雜俎は黒胡椒の梵名 *maricha* を味履支(*mo-ji-chi*)と記してゐる。)

西曆六世紀中葉のユスマス・インデコプレウスは始めてマラバル沿岸の胡椒を正確に西方に傳へ、以後イブンコルダドベール、エドリシト等のアラビア人により傳聞が報告されてゐるが、西歐人としては十二世紀のベンジャミン・ツデラが最初の様で十五世紀のニコロ・デ・コンチはスマトラ産に及ぶ *Piperis arbor persimilis est ederae, grana ejus viridia ad formam grani juniperi, quae modico cinere aspersa torrentur ad solem, et ivy に似てゐることを言つてゐるが、中世地中海貿易港諸都市の富は胡椒の轉運による處がすくなくなく、十二世紀の後半には西歐に於てもロンドンでは胡椒ギルドの成立を見たほどであつた。*

支那に於ける胡椒の需要は宋代以降に著しく、夫以前は香料全體に於て焚香料に比し調味香料に對する嗜好は餘り強くなかつたやうである。然し既に後漢書は天竺産に宋書、魏書、隋書は波斯國の産として胡椒をあげてゐるから上古に於ても醫藥用として印度から胡椒が僅少なから將來され珍重され

たのは勿論であらう。後漢書以外の書の多くが胡椒を産しない波斯國を以て産地とするのは遠西傳來を意味するのであらうか(之に關しヒルト、ロツクヒル兩氏の説に對するラウフアー氏の反對説があるが今は略する)。唐代には新修本草に西戎に産すると云ふ漠然たる解釋から除表の南洲記に「生南海諸國」との消息が現れてゐる。この場合南州記の南海を馬來地方の胡椒を指すものと考へ得るから遠國印度産よりも手近かな馬來地方産が支那人に注目された次第であると解して善からう。そして唐末の酉陽雜俎は前項に註記したやうに黒胡椒、長胡椒の品種的區別と植物の形狀や採取時期を記してゐるが終りに「肉食皆用」と從來の純粹の藥用以外に注目すべき用途をのせて胡椒の需要が食料調味上増加してゐることを暗示してゐる。宋代以降の胡椒の需要の増加は著しく、そしてその供給地はジャワを中心とするものであつたことは當代以降の南海地誌の諸書の詳細述べる處であり、元代のマルコポーロは泉州港に輸入する胡椒の量と西方エジプトのアレクサンドリヤ港に輸入する量には雲泥の相違が存し、支那側需要の驚くべきものであることを語つてゐる。

(ロ) 細荳蔻

多年生草本である *Elettaria Cardamomum* の果實が細荳蔻(或は白荳蔻)である。この植物は北部カナラ、クールグ、マラバル沿岸地方の二千五百乃至五千呎の高所に原産するが馬來半島の北部から印度支那半島の東南部地方にまで廣く及んでゐる。ジンジャーに屬し(*Scitamineae*)相當多種類を數え



るからジンジャー或は胡椒と混交して古くから西方に傳つたであらうとの想定が下されるのであるが、古代ギリシヤやローマの諸家が記述する *Anonum*, *Amonis*, *Cardanomum* (プリニーによる) 等が正確に細荳蔻を認識して意味したかは疑はしい。此點に就ては西方に傳つた胡椒、ジンジャー類のより深い考究を必要とするものと思はれ、私は夫等に内包されて既に傳播してゐたと考へる。梵名は *Pa* で學名 *Plectaria* の源流を示してゐる。そしてフェラン氏によるとアラビヤ人イブン・コルダドベに記されてゐるといふが、こゝに注意すべきは馬來半島北部からカムボヂヤ地方にかけて産した細荳蔻である。唐代の陳藏器は白荳蔻出伽古羅國呼爲多骨と稱し梵語の轉音に近いものをあげてゐると同時に肉荳蔻の條に迦拘勒の名を記してゐる。この迦拘勒はアラビヤ語とペルシヤ語の *Kakula* 梵語の *Kakkola* で正しくは細荳蔻を指すのであるから細荳蔻と肉荳蔻を混同してゐるが、馬來半島北部地方の細荳蔻が地名伽古羅に援引されるまでに高名であつたやうで、中世アラビヤ人旅行者の記事にも度々この地名があげられてゐる。

(ハ) 肉荳蔻

この細荳蔻とは別に肉荳蔻がある。之は原産地を丁香と同じくし、肉荳蔻科 (*Myristicaceae*) に屬する常緑の喬木で高さ十乃至十五米に達するものの果實であり、その種子が肉荳蔻 (ナットメツグ *Seenen Myristicae*)、この種子の底部をつゝむ假種皮が肉荳蔻花 (メイス *Macis*) で、後者は前者より

も氣味すこぶる緩和佳快に富み苦味すくなく香藥として古くより優品とされ現在に及んでゐる。そしてナツトメツグとメースが同一果實から採れる事實は近世まで一般には不明でその間随分混雜した考へ方が、丁度丁香と肉桂を一本の木の實と樹皮と見なしたと同様に存し、且つ丁香と原産地を同じくして居りながら實際中世のアラビヤ人（エドリシーに至つて始めて）によつて漸く諸種のスパイス類のうちにあげられるに至つたとなすが正確な様で、この點肉荳蔻の歴史は極めて漠然であると同時に不可解であるとも言はねばならぬが、肉荳蔻に對する需要が歐洲諸國民を主とした事實が原因したのかとも思はれる。支那に於ても前述の陳藏器が細荳蔻と混同してあげてゐるのと李珣の海藥本草に「生崑崙及大秦國」と西方人による支那への傳播を示唆するのが初めてのやうで、肉荳蔻に關する記録の缺除と舶載經路の間接とは唐代に於ける支那人のモルツカ諸島渡海の絶無とまではゆかなくとも夫に近かつたことを證するものではあるまいかと思ふ。肉荳蔻の梵名は *Jatiphala* でカムボヂヤでは *Kakor, gagar = bastard cardamon* 馬來及びビジャワ語は *Kapulaga, puvar* である。この歴史は中世の終りより近世の初めにかけて新しく登場した主要香味料としてより深く考究されねばならぬが現在の私はその智識にとぼしい。

(二) 大茴香

現在香料として使用する大茴香は南支（廣西）印度支那（東京）に生育する木蘭科に屬する *Illicium*

Verum Hook, L. で、樹高二十乃至二十五米に達する常緑喬木の果實で、通常大茴香と稱し、又その果實が八角形の星状をなす處からスター・アニスと呼ぶ。この大茴香と南部ソビエトロシアのアニス (*Pimpinella anisatum*) やフェネルと俗稱する草本の小茴香 (*Feniculum vulgare* L.) とは嚴格に區別して考へらるべきものである。この大茴香の歴史は歐洲傳播は勿論原産地に近接する地方に於ても不明で、支那では漸く明の李時珍の本草綱目に始めて記載されてゐるほどである。證類本草に新修本草其他を引て麝香一名茴香としてゐるがこの麝香は同書の圖が諸引用本草書の説明とともに正確に示すやうに高五六尺の叢生草本であるから小茴香に屬するものに他ならぬ。後の李時珍が湖嶺山中の大木とするのとは非常に異なつてゐる。然らば明代まで何故に顧みられなかつたか今後の考究にまちた

5。  
(註) プレットシユナイダーが (Chinese Recorder, Jan. 1781, 220.) 宋代南支那諸蠻地方よりの朝貢品にスターアニスありと言ふのは小茴香の誤解ではあるまいか。蘇頌の圖經本草等の説明より見て私は大きな疑問を持つてゐる。

### (七) 動物性の匂ひ

#### (イ) 麝香

支那の西部西藏、雲南、四川地方とシベリヤ及印度の北部に連るヒマラヤ山嶺及びバイカル湖に近

いアルタイ山脈の高山地方に棲息する麝香獸 (*Moschus moschiferus*, L.) は形鹿に類し體稍々少で一般に麝香鹿と通稱する。この牡麝は陰莖と臍との間に一つの腺囊即ち麝囊を有し、中に峻烈な香氣を發散する分泌物 (液) 即ち麝香を包有してゐる。牡麝は母躰を出る時から既に麝囊を具してゐるが大體二年位は其中は柔軟で不快臭を放つ乳狀物を有するのみであるが、三年目位から漸く麝香と稱し得るものを生じ生長するに従つて量を増し交尾期に最も多量となる。牡麝の糞は又強烈な香氣を放つが牝麝にあつては此香氣の痕跡すら存しない。陶弘景が「其香正在麝陰莖前、皮内別有膜包之」とし其他の支那の本草書が臍中有香とする等は大體眞に近い觀察で、始めは遺香即ち牡麝の躰外に排出したものを拾つてゐたが、後には生獸を捕へて香囊を採取したと考へられ「益州、雍州、山中春分取之、生者益良」と此間の消息を語るものであらう。そして極めて高貴な神仙秘藥の一であつたことは鼻を射す峻烈な香氣とともに牡獸の生殖腺分泌に基くものであり、麝の字は香氣の射すが如き性狀よりしかく名づけられたのである。

麝香の名は後漢書冉駹夷の項に始めてあり、この香料は支那人が西南山岳地方の蠻族から特異な高貴藥として教はり、後印度からその梵音が莫訶婆伽即ち梵語の *mushka* に當ることを知つたのか、或は後漢時代に始めて印度北部地方から麝香のことを教はつたのか、この點私は支那の麝香の起源は印度と關係がうすいもののやうに考へてゐる。ギリシヤ語 *muskos* ラテン語 *muschs* は中間に波斯語を

經由して梵語 *mushka* に繋ると思はれ、西方に傳つたのは聖ゼロメの記載に始りコスマス・インデコプレウステスに至つて明白になつたもので印度及支那よりもその歴史は古く遡らず、亦需要も東方よりは稍低かつたやうであるが、中世のアラビヤ人が注目してから漸次強烈な需要を持つに至つたと思はれる。

(ロ) 靈猫香

麝香に近似するシベット猫 (*Viverra genetta* L.) の牡牝兩者の肛門と生殖器の間に存する強烈な香氣のある腺分泌物が靈猫香 (シベット) である。唐代の支那人は如狸自爲牡牝或は「靈狸一躰自爲陰陽列其水道連囊」と此間の消息を記してゐる。本獸は印度、馬來半島、支那、アフリカ (エチオピア、ギネヤ、セネガル) の山地に棲息し香氣が麝香に近いため相當古くから實際は注目し亦利用されたと考へ得るが、靈猫香として認めらるるに至つたのは支那では唐代以後のことの様に見受けられる。夫は之が麝香の偽和品として専門家をも判定に困難ならしめる價值を有するからであらう。故に陳藏器は用之功似麝と言ひ同じく異物志に「其氣如麝、若雜眞香、罕有別者、用之亦如麝焉」とあるのを引用してゐる。宋代の諸蕃志の膾膈臍はヒルト、ロツクヒル兩氏の解する如く海狸獸よりも靈猫に近いものと解するのが妥當であらう。たゞ私は靈猫香に就て西方の關係が如何に發展したかを現在正確になし得て居ない。然し近世期の初めから西歐では麝香と並んで強烈な要求があつたことは認め

得る。亦靈猫香は水には溶解せずエーテル、ベンツオイル、クロロホルム、石油エーテルには容易に  
そしてアルコールには僅かに溶解するが、この溶液は極めて高い香氣に富み近代西歐人の嗜好に最適  
する香氣であつたから、シエクスピヤの作品中にはシベット流行の歌があり十八世紀の後半にはシベ  
ットエッセンスがもてはやされ、東方に通商する歐人は本獸の入手に努力し、その結果徳川時代の中  
期に我が蘭學者達が蘭人に生獸の輸入を依頼して研究する等の如き事もあつた。

(ハ) 龍涎香

此香料は眞甲鯨 (*Physeter macrocephalus, L.*) の体内に病的作用によつて生じた結石様の排泄物で、  
海上に浮遊漂着するもの或は眞甲鯨を捕獲してその体内に發見するものである。故に眞甲鯨の棲息す  
る海洋中には何處にも産する筈であるが、東アフリカ、アラビヤ沿岸と印度洋産が始めて知られ、次  
いで南海方面の洋上から日本の近海方面に及び、近代に入り南米、北歐の洋上にも採取するに至つ  
た。之は一見糞の凝固した極めて汚く且つそのままでは餘り芳香を放たず寧ろ腥氣に近い本品が、香  
料としての價値を認識され出した歴史的過程を物語るものである。

即ちアラビヤ語 *anbar* 印度各地語とマライ語 *anbar* 歐州各國語は葡西二國語で *anbar, ambre* の  
外に *alambur* も通用しアラビヤ語の冠詞 *al* を保存しアラビヤ語から轉じ現在の各國語となつてゐる。  
されば語源上からも龍涎香の香料としての價値と利用の發見者はアラビヤ人であり、中世に於ける彼

等の東西兩洋にまたがる通商活動により東西に廣く紹介されたと考へ得るのであるが、事實古代ギリシヤ・ローマ語には之に當るものなく且つ支那に於てもこの香料は唐代末期にアラビヤ人の渡來によつて始めて傳來したのである。故に東アフリカとアラビヤ沿岸の龍涎香が最初に香料として採取された譯である。

十二世紀のエドリシの地理書によると、八世紀のバグダットのカリフ・ハルン・ラシッドは龍涎香の眞因を把握しようと欲し種々調査の結果龍涎香が海底の泉より生じ夫が海岸に打上げられると結論したといふから、少くとも夫を遡るほど遠からぬ時期に知られたと思はれる。そして九世紀のストーマンは龍涎香が海綿類似の海底植物であると見なし、その後海底の樟腦だとアベロイスは考へ、また海水の浮泡の凝固したものだとの考へ方が十世紀以前に存し、更らに十世紀のアブザイド・アル・ハッサンは鯨の一種のタルといふ魚が漂流中の龍涎香を見つけると、それを嚙下して却つてそのため死すること、かうして死んで海面に浮ぶ鯨を土人が見るや直ちに鯨の龍涎香を嚙下した時を判断し、鯨を岸へ引いて腹を斷ちそれを取り出すといふ。かくて龍涎香の成因は徐々に鯨と關係あることが明白にされた。

支那では嶺外代答にアラビヤ沿岸で龍の涎末を漁人が採取したものとし、遊宦紀聞亦前記のアラビヤ人の諸説を記し、初期の記文は何れもアラビヤ沿岸産にのみ言及しアラビヤ人による智識の傳播を

物語つてゐるが、元代には島夷志略に於て馬來半島又はスマトラ島に近い位置にあると見なされる龍涎嶋の記事が登場し、明初の星槎勝覽や正徳年間の西洋朝貢典録亦同様である。夫等の記文は一見怪奇に満たされてゐるが島嶼に打寄する龍涎香の採取を誇大に種々の説を附して記したに他ならない。そして龍涎香は嶺外代答に「能聚煙耳、和香而用眞龍涎焚之、一銖翠煙浮空、結而不散、座客可用一翦分煙縷、此其所以然者、云々」とし氣腥能發衆香といふは非なりとしてゐるが、諸香料の調合保留劑として特異の效能を有し元來そのまゝの香氣は腥に近く、香煙が結して散じないのは香氣の保留が強かつたことを示すもので、この點能發衆香を非なりとするのは當を失する様に私は思ふ。我が近海の龍涎香は歐人の傳來以後彼等の欲求性の強さに刺戟されて發見され、早く足利時代に支那より龍涎香の名と實體が傳つてゐたが大體龍涎の名のみ著しく後に及んでも利用は廣く普及せず大部分は歐人に對する供給品であつたと解し得られる。

#### (八) 過去の香料の辿るべき道

以上の各種香料の概觀を以ても知り得られる様に過去の香料は何れの用途に供するものたるを問はず、大體植物の各部分或は分泌物と若干の動物性の極めて珍奇なものを原料とし乾燥保存するのみで、香氣の保存は密閉した容器に或は冷暗處に置くのみ等であるから時日の経過とともに佳香は消散



し易い。即ち植物の躰内にふくまるる香氣分である精油は極めて揮發性に富み原初の植物のままです保  
存することは極めて不完全なためである。

故に比較的香氣を永く保ち得る樹脂系のものを香料として利用し、その結果焚香が調味系の飲食  
料品賦香料と對立して香料使用の大きな分野をなしてゐたのである。然しこの薰じて香氣を發散せし  
め匂ひを觀賞する方法は、例へ本邦に於ける沈香の焚方に特殊の技術と訓練を以て清楚優雅な匂ひの  
美を知つたとしても、夫は焚香全體から見れば煙とともに香氣を感じるものであるから不完全な匂ひの  
感知方法であることは論を俟たぬ。だから煙の立たないものと便利に匂ひを感じる方法が出現すれば  
この薰(焚)香は必然的に衰退せねばならぬ。樟腦の蒸溜或はローズの蒸溜によつて植物の香氣分  
みを集めた精油が近世時に出現して過去の樹脂香料を主體とする焚香料がその位置を精油に譲つたの  
は當然である。

調味香料にしても肉類の保存のためといふが如きことは冷凍設備の進歩とともに不要となり、亦こ  
の方面の香料は現代に於ても昔の通り天然採取品に若干の加工をなすのみで使用はしても、植物の栽  
培がより容易に各地に廣まり増産が計られ、過去に於けるが如き熱狂的な價格を維持するが如きは夢  
と化し、通常の商品として昔日ほど有力な商品の王者たる位置を失つた。亦躰身用の香料も植物の各  
部分を水に浸漬するのでは香氣は極めて不完全であるが、脂肪類に香氣を吸收させる古代の技術から

進んで精油を脂肪類に應用し極めて安易に賦香品が作られるやうになりその用途を失つたと見るべきであらう。そして現代に入り古代の脂肪に香氣を吸收させた方法を利用しこの芳香吸收脂肪の香氣分のみを完全に抽出し絶対香精 (absolute essence) を作り水蒸氣蒸溜法によつては香氣を採集するに不完全な精油の製造に成功したのである。亦この精油なり或は天然動物性香料の香氣の代用に化學香料が生れ、過去の香料はその言葉通り過去のものとなつた。

(補遺) 金平亮三博士は沈香を分つて

(一) *Aquilaria* 屬、凡そ十一種が知られ、このうち *Aquilaria Agallocha Roxb.* を以て真正沈香とし *Aquilaria malacensis Lamk.* は主に馬來半島に産する類似品、

(二) *Gonostylus* 屬、凡そ九種が知られ、*Gonostylus barceanus Baili* が香木として價值ありとされている。

(主要参照書目)

加 福 均 三	に ほ ひ	昭和十七年
今井源四郎	香料の研究	大正七年
山田憲太郎	東亞香料史	昭和十七年
岡本良知	中世丁香傳播考	昭和十三年四月史學十六卷一號
岡本良知	中世に於ける龍涎香	昭和十三年五月小川香料時報十一卷五號

岡本良知 支那到來の胡椒 昭和十四年交通文化六・八號

岡本良知 肉桂史の一考察 昭和十四年一月小川香料時報十二卷一號

藤田豐八 東西交渉史の研究(南海篇) 昭和十八年再版

杉本直次郎 奇楠香と伽羅 南亞細亞學報二號

桑田六郎 三佛齊考 昭和十年九月臺北帝大史學科年報三輯

香字抄、香藥抄、香要抄(續群書類從所收)

香譜 宋、洪芻

香譜 宋、沈敬

香乘 明、周嘉胤

太平御覽(香部) 宋、李昉等撰

翻譯名義集(百華衆香篇) 宋、法雲

酉陽雜俎 唐、段成式

證類本草 宋、唐慎微

本草綱目 明、李時珍

J. Ch. Sawer, *Odorographia*, London 1892.

Flückiger and Hanbury, *Pharmacographia*, London 1879.

- G. Watt, Commercial Products of India, London 1908
- F. Porter Smith, Materia Medica and Natural History of China, 1871.
- H. Yule & A.C. Burnell, Hobson, Jobson, London, 1903
- H. N. Ridley, Spices, London, 1912.
- A. Lucas, Ancient Egyptian, Materials and Industries, London, 1934
- Theophrastus, Enquiry Into Plants (Loeb, Classical Library Ed.)
- W. H. Schoff, Periplus of the Erythraean Sea, 1912
- F. Hirth & W. W. Rockhill, Chau Ju-kha, 1911
- P. Pelliot, Extrait du Bulletin critique du F. Hirth et W. W. Rockhill, Chau Ju-kua, T'oung Pao, Vol. XIII. 1912.
- B. Laufer, Sino-Iranica, Chicago. 1919.
- W. Heyd, Histoire du Commerce du Levant au moyen age 1923, II.
- (追補) (一)安息香の優品である泰(印度支那)品を支那人は金顔香と稱し、之は馬來語 *Kemenyan* の轉訛であらうと記したが、スマトラ・泰品の區別を立てたのは東西を通じ支那人が始めてで、この馬來語は支那語金顔香から生れたものである。(詳しくは拙稿「支那に於ける安息香の名稱と内容に關する史的考察」(南亞細亞學報三號所收豫定)参照)
- (二)支那に於ける樟腦の輸出は明初の瀛涯勝覽、星槎勝覽よりも早く元代の島夷志略に喃啞哩の交易品中にあり、宋末から元初にかけて樟腦製造が相當發達してゐたことを知る。
- (三)大茴香は宋代の范成大、桂海虞衡志に八角茴香の名があり、又周去非、嶺外代答に「八角茴香、出左右江蠻峒中、質類翹尖、角八出、不類茴香、而氣味酷似、只可合湯、不宜入藥、中州士夫以爲薦酒、咀嚼少許甚是芳香」と正確に記し、一部には善く知られてゐた。ブレット・シュナイダーの説も或は事實であらう。ここに本文を訂す。

(四) 印度支那及び南海諸地方で龍腦と麝香を油に溶解させ身體に塗る風習があつたことが舊唐書(林邑傳)・諸蕃志(占城)・島夷志略(占城) 其他に見受ける。麝香、龍腦は水に難解であるから相當進歩した用法で此場合靈猫香が麝香の代用に充てられたことあつたらう。

(五) 主要参照書目追加。南方草木狀、桂海虞衡志、嶺外代答、諸蕃志、島夷志略、星槎勝覽、瀛涯勝覽  
G. Ferrand, Relation de voyages et textes géographiques arabes, persans, 1913—1914; J. Craufurd, Descriptive Dic. of the Indian Islands. 1856: Ancient Accounts of India & China, by the mohammedan travellers, who went to those parts in the 9th century, 1733; J.T. Reinaud, Relation des voyages faits par les arabes et les persans dans l'Inde et à la Chine dans le IXe siècle 1845; H. Yule & H. Cordier, Book of Ser Marco Polo, 3rd. Ed. 現代の南海香料に就ては拙稿「南方共榮圏の香料資源」(小川香料時報昭和十八年五月號) 参照。